

海外ビジネスの最前線で奔走する日本人と、 圧巻のヒロイン像！

篠田節子の小説はいつもパワフルだ。物語はどんどん進んでいくので、ぼんやりしていると振り落とされてしまう。しかしその物語をしっかりと掴むと、躍動感あふれる世界に、私たちは案内される。それが篠田節子を読む喜びだ。

まず本書の背景から紹介する。主人公藤岡は「山峡ドルジェ」の婿養子にして社長だが、マザークリスタルの買い付けに世界の辺境を訪ねてまわっている。「山峡ドルジェ」は戦前まで、甲府市内に店をかまえ、歴史ある水晶加工の技術をいかし、世界各国から原石を輸入し、研磨し、国内外に製品を送りだしていたが、戦後は、無線通信用水晶発振器の製作に乗り出し、宝石研磨加工から精密機械部品製造に事業を転換する。そしていまは惑星探査機につける超高性能水晶振動子の開発に取り組んでいる。そのために原料となる超高純度の人工水晶の開発から始め、その核となるマザークリスタルが必要になったというわけだ。本書は、インドのクントゥーニという小さな町で産出する天然水晶が、藤岡たちの作る水晶振動子に最適であることが判明してその町を訪れるところから始まる。

そのクントゥーニという田舎町に、新素材開発の鍵を握る鉱物があることが広く知られてしまうと、同業他社が乗り出してくるだろうし、争奪戦など演じたらその貴重さに気づいたインド政府が国外持ち出しを制限してくる可能性は大。つまり、すべてを秘密裡に行わなければならない。ところが、藤岡はヒンディー語ができず、インドの事情にも疎い。はたして大丈夫なのか。心配しながらも藤岡は出掛けていく。それまでも、アフリカからブラジルまで、世界のどこにでも一人で行って

いたのだ。インドだからといって臆^{おく}ずることはない。

というわけで、インドのクントウーニという小さな町を舞台に、藤岡の悪戦苦闘が始まっていく。金銭目当ての誘拐が当たり前（しかも警察官を装ったりする）という地域である。さらに現地の人間が、

「言っておきますが、部族の連中は、出た石がだれのものかなんてことは考えてやしませんよ。契約？ 約束？ 彼らにそんな概念があるのでしょうか？ 金が欲しければ、くすねる。出させてしまえばこっちのもの。そういう連中です」

というくらいで信用もできない。倉庫を作ってくれ、道を作ってくれと彼らの要求に際限はないのだ。それを全部聞いていたら大変なことになる。もつとも、現地の地主の息子で若い世代の代表たるラージェンドラに言わせると、

「文化程度の低い人々は、どこにでもあります。金があるかないかの問題じゃないし、カーストの問題でもない」

ということだから、あまりマイナスの面を強調しすぎると本質を見誤りやすい。若いときにインドを放浪したカレー屋のマスター^{つかさ}司が語るインド人の温かさもここに並べれば、必ずしもインドの人々が強欲であるわけでもない。ようするに藤岡はどの国にもある社会の矛盾と直面せざるを得ないということだ。そういう海外ビジネスの最前線で奔走する日本人の姿を、篠田節子は、個性豊かなわき役を配し、印象深い挿話を幾つも積み重ね、鮮やかに描いている。

これだけでもたつぷりと読ませるが、もちろんこれだけではない。宿泊先で使用人兼売春婦として働いていた少女ロサと知り合い、彼女の抜群の記憶力に驚き、劣悪な環境から救出して、通訳兼案内人として村人との交渉に臨むという横糸を付け加えるのである。そのくたりに、まだ田舎に残っているデヴァダーシーという風習が紹介されている。

これは、女の子はいずれ多額の持参金つきで人にやらなければならぬので、養い切れない娘を親が寺に奉納してしまう風習で、いったん寺に奉納されたあと、近くの町の売春宿に供給されるか、金持ちや地主に買われていくのだという。ロサも寺に奉納されたあと、娼婦兼厨房^{ちゆうぼう}の下働きとしてここにやってきたというのだ。

この少女ロサをめぐる話はどう膨らんでいき、縦糸と横糸は複雑に絡み合っていく。その詳細はここに書かないが、このヒロイン像が圧巻だ。ラストまで一気読みの傑作である。

きたがみじろう・文芸評論家